

「暇つぶし」にグラウンドゴルフでもいかが？：
スポーツを通じて得る他地域とのつながり

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学分野 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 脊川, 碧志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000599

「暇つぶし」にグラウンドゴルフでもいかが？

～スポーツを通じて得る他地域とのつながり～

脊川碧志

- 1 はじめに
- 2 久能のスポーツをめぐる過去と現在
 - 2.1 スポーツが盛んだった過去の久能
 - 2.2 つながりの薄れた久能の現状
- 3 グラウンドゴルフ葵会
 - 3.1 発足の経緯
 - 3.2 活動概要
- 4 葵会のメンバーが語るグラウンドゴルフの魅力
 - 4.1 イチゴ農家とグラウンドゴルフの両立
 - 4.2 グラウンドゴルフが夫との共通の話題
- 5 考察
- 6 おわりに

1 はじめに

久能にはかつて多くの住民組織、それらを介した住民同士のつながりが存在した。それは、久能小学校の同窓会や PTA、久能学区連合町内会、久能学区体育振興会、そして隣組などさまざまである。しかし、これら住民組織のうちのいくつかが形骸化している現状では、住民同士のつながりが希薄になっているという。そのような状況下で人々は、どのように人間関係を作っているのか、久能でグラウンドゴルフをしている人たちに焦点を当てて考えていこうと思う。

2 久能のスポーツをめぐる過去と現在

この節では、久能の過去と現在のスポーツを通じた人と人のつながりについて、文献資料

『久能の昔を伝えるもの』(1982) や、静岡市駿河区安居（以下、安居とする）在住の石垣輝久さんから聞いた話をもとに見ていこうと思う。

2.1 スポーツが盛んだった過去の久能

久能のスポーツの歴史について調べたとき、最初に感じたことが文献資料の少なさである。静岡市立久能小学校編の『久能の昔を伝えるもの』(1982) には、1970 (昭和 45) 年に、神社庁より神社の外郭団体育成の提案があり、また当時の宮司のもと、神社が地域との密接な関係のもとに発展してきた歴史的経緯からも地域社会に対して何らかの貢献をしなければならないとの考えから、久能山東照宮・久能小学校・久能連合町内会が一致団結して、「久能スポーツ少年団」が結成されたと記されている。会長は久能山東照宮の宮司が務めており、会の活動に対して久能山東照宮が援助・育成をするという形で寄与していた（静岡市立久能小学校編 1982：67）。

このように、久能はかつてスポーツが盛んな地域であった。安居で生まれ育った石垣輝久さん（男性、81 歳、安居在住）によると、久能では約 20 年前まで年に 1、2 回の学区対抗のスポーツ大会が開かれていたという。また、表 1 は久能の西平松公民館に飾られていた 1972 年から 2004 年にかけてのスポーツ大会の賞状にそれぞれ書かれていた大会の開催年月日、主催団体、競技種目を書き出し、表にまとめたものである。これを見ると競技種目は、サッカー、ソフトボール、ゲートボール、バルーンバレーボールなど多種にわたることがわかる。また婦人ドッジボールや婦人バスケットボールの大会が開催されていたことから、女性たちのチームもあったことがわかる（表 1）。

開催年月日		主催団体	代表者	競技
1972年	1月15日	久能スポーツ少年団育成会	会長 白井光男	少年サッカー
1977年	5月29日	静岡市教育委員会		久能小学区ソフトボール
1977年	5月29日	静岡市教育委員会		久能小学区サッカー
1977年	6月5日	静岡市教育委員会		久能小学区バレーボール
1978年	5月21日	静岡市教育委員会		久能小学区バレーボール
1978年	5月28日	静岡市教育委員会		久能小学区ソフトボール
		久能体育振興会		
1979年	5月27日	静岡市教育委員会		ドッジボール
1982年	6月6日			ドッジボール
1982年	10月10日	静岡市教育委員会		久能学区大運動会
1985年	7月7日	久能学区体育振興会	会長 海野敬太郎	ソフトボール
1986年	11月3日	久能学区体育振興会	会長 杉山行雄	ゲートボール
1987年	7月26日	体育振興会	会長 杉山行雄	サッカー
1988年	6月5日	久能学区体育振興会	会長 杉山行雄	球技大会
1988年	10月9日	久能学区体育振興会		久能学区運動会
1989年	6月4日	久能学区体育振興会	会長 杉山行雄	ドッジボール
1989年	7月16日	久能学区体育振興会	会長 杉山行雄	ソフトボール
1990年	6月24日	久能学区体育振興会		婦人ドッジボール
1992年	7月5日	久能体育振興会		ドッジボール
1993年	6月6日	久能体育振興会		ドッジボール
1994年	5月22日	久能体育振興会		ソフトボール
1994年	6月5日	久能体育振興会		婦人ミニバスケットボール
1995年	5月14日	久能学区体育振興会		ソフトボール
1996年	6月9日	体育振興会		婦人会玉入れ
1997年	5月11日	久能学区体育振興会		ソフトボール
1998年	5月10日	久能学区体育振興会		ソフトボール
1998年	10月4日	久能学区体育振興会		大運動会
1999年	6月6日	久能学区体育振興会		婦人会バレーボール
2000年	10月1日	久能体育振興会		大運動会
2001年	5月13日	久能体育振興会		ソフトボール
2001年	6月3日	久能体育振興会		バレーボール
2001年	9月30日	久能体育振興会		久能学区代運動会
2002年	6月9日	久能体育振興会		バレーボール
2003年	6月8日	久能学区体育振興会		婦人会バレーボール
2004年	6月6日	久能学区体育振興会		婦人会バレーボール

表1 西平松公民館にある賞状からみた久能における1972年から2004年までの
スポーツ大会の開催状況（脊川作成）

この表から、少なくとも2004（平成16）年までは、久能学区体育振興会によって久能全体でスポーツ大会が開催されていたことがわかる。前掲の石垣さんによると、当時は各大会のために安居や西平松といったそれぞれの地区でチームをつくり、優勝を目指して切磋琢磨していたという。

ところで、石垣さんはイチゴの観光農園を経営する農家で、久能でグラウンドゴルフをする人たちの集まりである「グラウンドゴルフ葵会」のメンバーでもある。石垣さんは、かつて久能でスポーツが盛んであったことを自身の経験から次のように語っていた。

〈事例1 石垣輝久さん（男性、81歳、安居在住）〉

石垣輝久さんは久能で生まれ育ち、静岡市立久能小学校、静岡市立高松中学校を卒業した。小学校と中学校では野球をしており、中学2、3年生の時には県大会で優勝した経験もあるという（写真1）。その際、久能では、高松中学校野球部に所属する、久能出身の選手たちを労って優勝パレードを大々的に行ったという。それほど当時の久能はスポーツに力を入れていたという印象が強かったと石垣さんは語った。



写真1 1961年の静岡県野球大会で高松中学校が優勝した時の記念写真
（石垣輝久さん所蔵、2023年6月1日脊川撮影）

石垣さんの中学生時代のエピソードは、西平松公民館に飾られた賞状のデータと合わせて、かつての久能はスポーツが盛んであり、スポーツを通して人々がつながり、活気に満ち

ていたことを示している。

以上見てきたように、今から約 15 年前までは久能で盛んにスポーツ大会が開かれていた。

2.2 個人化にともなうスポーツの衰退

次に隣組などの住民組織の活動が目立たなくなり、個人化している久能においてスポーツをめぐる活動がどんなふうに変わってきているのかを見ていこうと思う。

グラウンドゴルフ葵会の会長であり、西平松在住の小澤友良さんは、人口減少と高齢化により、今から 20 年ほど前の 2004 年ごろからスポーツ大会が開かれなくなったという印象を持っている。ただ、久能全体のスポーツ大会を開催していた久能学区体育振興会（スポーツ推進委員の所属先）は、コロナ前まで年に 1、2 回ほど活動していたそうである。スポーツ推進委員とは、スポーツ基本法・静岡県スポーツ推進委員会規則にもとづいて、教育長から委嘱されている非常勤の公務員のことである。小澤さんも 12 年前まで体育指導委員（現・スポーツ推進委員）をしていた。しかし、現在は久能連合町内会の会長と副会長がスポーツ推進委員を兼任しており、体育振興会は実質的にはなくなったという。さらにコロナ前までは、地域住民が参加していた久能小学校での大運動会も、2020 年から現在まで小学生だけで行われるようになった。

こうした状況が生じている背景には、久能における住民組織の形骸化がある。15 年前まで久能では隣組が自治会の末端組織として機能していた。一般的に隣組は、町内会の下部組織として町内会費を集金したり、回覧板を回したり、葬儀など人手が必要な時に互いに手伝いをしあったりする組織である。石垣輝久さんによれば、久能では一年に一度組内の誰かの家に集まり、食事会や暇な時の情報共有もしていたという。しかし現在は、少子高齢化に伴い、誰かの家に集まるとするのが難しくなり、食事会は開かれなくなり、情報共有も町内会長が回覧板を各隣組に回すだけとなってしまったという。以上のことから、久能では人口減少と高齢化により住民組織の維持が難しくなり、それが住民間の交流を減少させてきたことがわかる。また、新たに久能に移り住む人も少ないなかで、スポーツをする層の高齢化が進み、スポーツ大会の開催も困難となった。それでも体育振興会により何度かスポーツ大会が開催されていたものの、コロナ禍により活動はさらに制限され、2023 年には体育振興会がなくなるに至った。また、コロナ前までは地域全体で開かれていた大運動会も小学校だけで開かれるようになり、それは 2023 年現在でも変わらない。

3 グラウンドゴルフ葵会

前節では、スポーツが盛んであり、住民同士のつながりも深かった久能が、人口減少や高齢化、さらにコロナ禍によりその勢いがなくなってしまったことについて触れた。

次にこのような状況の久能で小澤友良さんが始めた「グラウンドゴルフ葵会」（以下、葵会とする）の発足の経緯と活動概要について述べる。

3.1 発足の経緯

まずは、葵会の発足の経緯について、葵会の現会長である小澤友好さんへのインタビューにもとづいて述べていく。

〈事例2 小澤友好さん（男性、72歳、西平松在住）〉

前項でも述べたように、小澤さんは、今から20年ほど前から久能でスポーツ大会が開かれる回数が減ってきたという印象を持っているという。当時、清水にある企業に勤めながら久能で体育委員をしていた小澤さんは、「老後に夫婦共通の趣味として何かスポーツをしたい」と考え、「グラウンドゴルフ同好会」（以下、同好会とする）を結成した。だいたい2008（平成20）年前後のことで、小澤さんが57歳のときだった。発足時のメンバーは小澤さんの知り合いや、その知り合いから誘われた同世代の人で、40人から50人はいたという。しかし2年後に実際に活動を始めた際には30人ほどに減少していたという。これはメンバーを集める際、名前は記入したものの、本気でやるつもりはなかったというような人が何人もいたからだと言っていた。その後新しい人が入ってくるのがなく、また高齢化によりスポーツをすることが困難になる人も出てきて、そのまま現在の十数人にまで減少したということだ。

写真2は2012年9月2日に開かれた第10回区民総体のグラウンドゴルフの部で、同好会が準優勝したときの記念写真である。この写真には大会に参加した17名が映っており、ここから同好会全体でそれ以上の数のメンバーが参加していたことがわかる。



写真2 2012年の第10回区民総体で準優勝した際のグラウンドゴルフ同好会のメンバー
(小澤友好さん所蔵、2023年6月1日春川撮影)

小澤さんは31歳の時(1982年頃)に清水(現・静岡市清水区)から久能に引っ越してきたそう。清水では、中学時代にバレーボール部に入っていたり、勤めていた会社でバレーボールチームを作ったりしていた。さらに、久能に引っ越してからは婦人会のバレーボールのコーチや体育委員などをしていた。このように小澤さんにとってスポーツは生活の一部となっている。もちろん久能で行われる地区対抗のバトミントンやソフトボールの大会にも積極的に参加していたという。31、32年前(1991、1992年頃)には小澤さんが盆踊り大会を久能で主催し、10年くらい前(2013年前後)まで続けていたそうである。小澤さん曰く、「活発に活動する、『楽しむ』ことこそが人生の目的であり目標である」とのことだ。

そのような小澤さんが久能でのスポーツの機会の減少という問題について何も考えない方が不思議な話である。小澤さんは企業に勤めていた頃、特に若い頃は仕事が忙しく、久能でスポーツ関連の活動に関わるには少し時間が足りなかった。しかし、今から18年前(2005年頃)、勤務先での所属部署が変わったことにより自由時間が増えた。このことが同好会を発足する大きなきっかけになったという。発足にあたって、当時まだ小澤さんは会社員であったため設立には中心的に関わったが、会長の役目はOさんという人に任せていた。そして、Oさんが引退したタイミングで小澤さんが会長を引き継いで現在まで続けている。ただ、次の会長を決めているのかと聞いたところ、「誰に引き継ぐかは決めていない。正直、会を存続するかどうか考えていない」とのことであった。(2023年6月1日、西平松緑地にて聞き取り)

以上見てきたように 20 年ほど前からスポーツをする機会が減少していった久能に住む小澤さんが、老後の夫婦共通の趣味にしたいと思い立ち、始めたのが現在の葵会である。発足当初から人数はだいぶ減ってきてはいるが、現在でもメンバーと楽しくグラウンドゴルフをプレイしている。ただ、小澤さん自身、後継者を誰にするか決めていないことから、葵会がこれからどうなるかはまだわからないのが現状である。次節では現在の葵会の活動概要について述べる。

3.2 活動概要

同好会は現在、グラウンドゴルフ葵会という名前に変わって活動を続けている。葵会は現在メンバー十数人であるが、実際にグラウンドゴルフをしているのは 7、8 人である。また、メンバーは大半が農家であるため、イチゴ農園の繁忙期になるとさらに人数は減るといえる。グラウンドゴルフは個人競技ではあるが、人数が少なすぎると楽しくない。そのため、現在葵会は「大谷シニアクラブ」という、大谷を中心にさまざまな場所でグラウンドゴルフをしているチームと合同で活動することがほとんどである。葵会に入っているメンバーのほとんどが大谷シニアクラブにも入っている。

葵会の活動場所は久能小学校と大谷小学校である。毎月固定で、第 2、4 土曜日の午前 8 時半からは久能小学校、毎週日曜日の午前 8 時からは大谷小学校でグラウンドゴルフをしている。また、不定期に静岡市の恩田原スポーツ広場や西平松緑地という地区の公園でも活動をしている。不定期に行われる日の予定は前月の 20 日に小澤さんが予定表をつくりメンバーに配布している。また葵会のみで活動をする際の場所取りは会長である小澤さん自身があらかじめ予約をとっている。

私は調査中の 2023 年 5 月 28 日日曜日の午前中に、大谷小学校でのグラウンドゴルフに参加する機会を得た（写真 3）。その日、久能から参加したのは小澤さんと男性 1 人だけだったが、普段は小澤さんの奥さんなど他にも数名が参加しているという。大谷小学校での活動には 30 人ほど参加しており、ほとんどが大谷の人だった。午前 8 時前に集まり、集まった人からグラウンドの整備や用具の準備をし始めた。1 人で黙々と準備する人もいれば、友人とお喋りをしながら和気藹々と準備をする人、日陰でお茶を飲みながら休んでいる人などさまざまであり、自由な雰囲気であった。8 時 20 分くらいに準備が終わると、皆慣れたように日陰のある水道の近くに集まり、くじでグループ分けをした。ひとグループ 4、5 人で 20 コースを回るのがこの場所のルールだ。皆自分用のボールとクラブを持ってきており、私は大谷小学校に置いてあるクラブとボールを借りて、グループに入れてもらった。

コースはそれぞれ 50m、30m、10m、5m と 4 種類ある。3 打でボールに入れたらパー、2 打で入れたらバディ、1 打で入れたらホールインワンである。私ははじめてグラウンドゴルフをしたのだが非常に難しく、5m の時に 1 回だけホールインワンを決めたきり、パーを取るのも一苦勞であった。しかし同じグループのメンバーは距離に関係なくほとんどがパーやバディであり、一番近い 5m の時は大体ホールインワンを決めていた。グラウンドゴル

フは一見簡単そうに見えるが、力加減や打つ方向など案外コツが必要であることがわかった。20コースを終えると15分から20分ほど休憩し、その後もう一度同じグループで20コースを回った。合計40コースを終えるとまた日陰のある水道の近くに集まり、全員分の記録の集計をした。それぞれ友人と話しながら結果が出るのをどこかソワソワして待っている様子であった。集計が終わると小澤さんから上位10名の名前と記録が発表された。この10名はその週の静岡新聞のスポーツ欄に名前が掲載されるため、皆それを楽しみにしているようだ。



写真3 大谷小学校でのグラウンドゴルフの様子
(2023年5月28日、脊川撮影)

グラウンドゴルフを終えると、皆でグラウンドの整備と片付けを行った。その後片付けが終わると帰宅する人もいれば、別のスポーツの練習の準備をする人もいた。2週間後に控えたベタンクという競技の大会に向けての練習をするためだった。ベタンクの練習に残ったのは12人ほどであった。この競技にも私は参加することができた。ベタンクは基準となる目標球により近くに位置させるように鉄の球を投げる、フランス発祥の競技である。グラウンドゴルフに比べて比較的簡単で、初心者私でも何度か好プレイをすることができた。ベタンクを終えると皆で片付けをし、それぞれ帰宅した。

今回、私は初めてグラウンドゴルフに参加してみて、率直に思ったのは、想像より難しいということである。私は中学、高校でバスケット部に所属しており、体を動かすのは得意な方な

のだが、グラウンドゴルフはあまり上手いかなかった。グラウンドゴルフは体力を使うスポーツというよりも、力加減や打つ方向、打ち方など主に技術が要求されるスポーツである。これらの技術は、他のスポーツにも共通することかもしれないが、一朝一夕で身につくものではなく、長い練習が必要だと考えられる。

ただ、グラウンドゴルフの難しさだけでなく、その魅力もいくつか知ることができた。その一つは、4、5人1組でコースを回るため、コミュニケーションを積極的に取ることができる点である。大谷小学校のグラウンドで今回はプレイをしたのだが、広いコースであるため移動する間に打ち方のコツや世間話などたくさん会話をすることができて楽しかった。グラウンドゴルフは難しく、何も知らない状態で始めるには骨が折れるかもしれないが、一緒に回るメンバーに教えてもらったり、昨日あった面白い出来事や今日の献立の話をしたりと、家の中に1人でいてはできないような会話を、他のスポーツよりも多くすることができるという点が魅力の1つである。また、ルールがあまり難しくもないというのも魅力の1つだろう。私はグラウンドゴルフに参加する前日、何も知識がない状態で行ってはプレイができないかと思い、インターネットサイトでグラウンドゴルフのルールについて少し調べたのだが、特に珍しくはなかった。そのため、コツを教えてもらい、技術さえ身につけばすぐにゲームを楽しめるようになれるだろう。

この節では、グラウンドゴルフ葵会の発足の経緯を、現会長の小澤友好さんへのインタビュー内容から明らかにしてきた。そこには、久能でスポーツの機会を増やしたいという考えだけでなく、退職後に夫婦の共通の趣味がなければ家庭内で2人とも暇になってしまうと考え、その余暇を楽しむための趣味として始めたのがグラウンドゴルフであることがわかった。さらに、私自身が葵会の活動に参加した経験を通して大谷シニアクラブと合同で行っている活動の様子や、グラウンドゴルフのスポーツとしての魅力について述べてきた。グラウンドゴルフは技術の必要なスポーツであるが、ルールは簡単であり、また数人とともにコースを回ることでメンバーと会話できる楽しみがあることがわかった。

4 葵会のメンバーが語るグラウンドゴルフの魅力

前節では、葵会の発足の経緯と活動概要についてから見てきた。第4節では、葵会のメンバーのインタビューを通して、それぞれが葵会に入るに至った経緯や、それを通して見える久能のスポーツをめぐる事情について考えていこうと思う。

4.1 いちご農家とグラウンドゴルフの両立

まずは、事例1でも紹介した石垣輝久さんへのインタビュー内容から、いちご農園経営とグラウンドゴルフ、つまり仕事と趣味を両立することの難しさ楽しさについて述べてい

く。

〈事例3 石垣輝久さん（男性、81歳、安居住住）〉

事例1でも述べたように、石垣さんは、久能で生まれ育ち、若い頃からスポーツを続けている。とりわけ、野球は学生時代だけでなく、就職してからも会社の野球チームに所属してプレイしていたという。退職後は「石垣園」というイチゴの観光農園を現在まで経営している。また60歳から65歳まで、清水で還暦野球のチームに所属しており、同世代の仲間たちとともに野球を楽しんでいたという（写真4）。還暦野球を始めた動機として石垣さんは、「人との“つながり”や“関係づくり”がいちばんの目的であり、1番の楽しみ」と語っていた。



写真4 石垣輝久さんが所属していた還暦野球チーム
（石垣輝久さん所蔵、2023年6月1日脊川撮影）

石垣さんは、久能に同好会ができる約5年前から、奥さんや兄妹とグラウンドゴルフをしていたという。プレイする場所は、三保（静岡市清水区三保）や藤枝、浜松などさまざまであった。しかし同好会ができてからは、近場でできる方が良いと考えて同好会に参加するようになったという。また、1、2年前に石垣さんの奥さんである、石垣花子さん（女性、79歳）も葵会のメンバーに仲間入りした。これは、輝久さんの誘いを受けてのことであり、多忙な農作業の息抜き・気晴らしとなるように、という輝久さんから花子さんへの気遣いによるものであった。

現在、花子さんが足を悪くしてしまったことにより、輝久さんがイチゴや裏作によるネギなどの葉物の栽培、出荷や観光農園の経営に集中していることもあり、石垣さん夫妻はあま

り活動に参加できていないが、それ以前は頻繁に葵会、大谷シニアクラブの両方に参加していた。そのような石垣さんは、久能でのグラウンドゴルフに対して次のような率直な意見を語っていた。それは、久能で少ない人数でプレイするよりも、大谷や恩田原スポーツ広場などで、大人数でプレイする時の方が楽しいということである（2023年5月29日、石垣さん宅にて聞き取り）。

ここまで、石垣輝久さんの語りを見てきた。まず、石垣さんの久能でのグラウンドゴルフに対する考えに注目したい。たしかにスポーツは少人数よりも大人数での方が色々な話を聞くことができ楽しい。また、技術も多くの人から学ぶことができるため、より良いだろう。このことが久能で生活する石垣さんが大谷やその他の地域までグラウンドゴルフをしに出かけて行く理由であると思われる。

また、先述の通り石垣さんは石垣園というイチゴ観光農園を経営している。農作物の出荷と観光農園経営の両方で生計を立てており、繁忙期はとても忙しい。しかしそのような多忙な日々の中でも、時間を見つけては心の休息、気晴らし、そして健康増進にとグラウンドゴルフをしている。元々スポーツが好きな小澤さんだが、仕事が忙しいとスポーツばかりというわけにもいかない。そのような状況下でも花子さんやたまに農作業、観光の手伝いをしにきてくれる娘さんのサポートがあれば、葵会や大谷シニアクラブのメンバーと一緒にグラウンドゴルフをする。グラウンドゴルフは技術を必要とするスポーツであることは間違いないが、そのルール简单さ、また久能小学校や西平松公園など農作業で忙しい高齢者でも気軽に足を運べる場所のできることから他のスポーツに比べて手を出しやすいところが魅力である。そのような魅力に惹かれて足を運んだメンバーたちとつながり、たわいもない日常会話をすることが石垣さんの生活をより豊かなものにしていないだろうか。

4.2 グラウンドゴルフが夫との共通の話題

次に石垣輝久さんの妻・石垣花子さんの語りを紹介する。花子さんの話から、もとはスポーツをあまりしなかった人が葵会でグラウンドゴルフをする理由について見ていこうと思う。

〈事例4 石垣花子さん（女性、79歳、安居住住）〉

石垣花子さんは、夫の輝久さんと同じく久能で生まれ育った。十代で静岡市内の洋裁学校に通っていた頃に輝久さんと出会い、結婚に至った。結婚をするにあたって花子さんは、スポーツが大好きな輝久さんがこれからの人生で、大好きなスポーツを我慢することがないようにやりたいことはなるべくやらせてあげたいと思っていたという。

花子さんは元々スポーツがあまり得意ではなく、むしろ嫌いだったと語っている。スポーツが嫌いなことを示すエピソードとして、学生時代にドッジボール大会で逃げ回っていたことを話してくれた。そのような花子さんは先述の通り、今から1、2年前に輝久さんに誘

われ葵会に入った。スポーツ嫌いの花子さんがなぜ葵会に入り、グラウンドゴルフをしているのかと尋ねたところ、理由を3つ語ってくれた。1つは、グラウンドゴルフがこれまでの他のスポーツと違い、それほど苦手に思わずにできて、そこそこ良い結果を残すことができたからであった。たしかにグラウンドゴルフは体力のない人でもでき、軽く打つだけでボールが遠くまで飛ぶため（その調整をするのが難しいのだが）、強い力も要求されない。瞬発力や反射神経も他のスポーツに比べると必要としない方である。

2つ目は、グラウンドゴルフは単に体を動かすだけでなく、他の人と関わることができるからである。農作業は孤独で、体力をよく使う。観光の時は、人と関わることはできるが、それは店員とお客という立場である。グラウンドゴルフでは、花子さんという1人の人間として、人と関わることができる。輝久さんが花子さんを誘った理由も、農作業で大変な花子さんの気晴らしになったらというものであった。

そして3つ目の理由が、グラウンドゴルフだけは、スポーツマンである輝久さんと家庭内で対等に話すことができる共通の話題であるということだ。これは葵会会長の小澤さんの語りでも出てきたことである。仕事を引退し（石垣さんはまだ続けているが）、家庭内で過ごす時間が増えると、自由な時間も増えることだろう。そのようなときに夫婦共通の話題が1つ増えれば、生活が楽しく、豊かになる。小澤さん、石垣さん夫婦はそのように考え、グラウンドゴルフを始めたということであった（2023年5月30日、石垣さん宅にて聞き取り）。

ここまで、石垣花子さんの語りを見てきた。まず、輝久さんが好きなスポーツを遠慮なく好きなだけさせてあげたいという花子さんの思いやりが、輝久さんの仕事と趣味の両立に貢献していることがわかった。

また、花子さんがグラウンドゴルフにハマった理由の1つに気軽に手を出せるグラウンドゴルフの特色がある。さらに、プレイ中やそれ以外の時にできるメンバーとの日常会話が花子さんにとって良い気晴らしになったことが考えられる。加えて、輝久さんとの家庭内での共通の話題づくり・共通の趣味としてもグラウンドゴルフが花子さんの生活をより楽しいものに行っていることだろう。

この節では、葵会のメンバーである石垣夫妻へのインタビュー内容から、葵会に入るに至った動機、グラウンドゴルフの魅力、久能でのグラウンドゴルフ事情について見てきた。葵会に入るに至った動機としては、近場でできることや、スポーツが苦手でもグラウンドゴルフはできたこと、高齢の体でも楽しめることなどさまざまだった。また、グラウンドゴルフの魅力は激しい動きがないことや、メンバーと話す機会が豊富であるということである。これのうち、私が注目したいのは後者である。これについては次節の考察で改めて取り上げることにする。

また、小澤さん、石垣さんの2人に共通していたのは、家庭内でのパートナーとの話題づくり、共通の趣味づくりであった。このように、グラウンドゴルフの魅力は人との関係づく

り、つながりづくりであるといえる。そして、それゆえに久能でグラウンドゴルフをすることには限界もある。人とのつながりを求めて、久能よりも人数が多い大谷シニアクラブに参加する人たちがいるのは当然であると思われる。久能はそもそも人口が少ない上、グラウンドゴルフをする人は7、8人というのが現実である。これではグラウンドゴルフを十分に楽しめないように感じる。そしてそのように感じる人たちは少し遠いと思っても大谷やその他の地域にグラウンドゴルフをしにいくのだろう。

5 考察

ここまで、かつて久能ではスポーツ大会などの行事が盛んであったが、高齢化や人口減少を背景に次第に開かれなくなり、スポーツを通して人と関わる機会が減ってしまった現状を見てきた。また、そのような状況下でグラウンドゴルフ葬会が発足した経緯や現在の活動状況、個々のメンバーが葬会に参加した経緯、グラウンドゴルフに対する考えなどを見てきた。この節では、それらのデータをもとに久能でスポーツが行われなくなった原因について考えるとともに、久能でグラウンドゴルフをすることの難しさ、さらにグラウンドゴルフを通して得られるものについて考えていこうと思う。

久能のスポーツが廃れてしまった直接の原因はやはり人口減少であろう。本報告書の調査地概要でも触れているように、久能では年々人口が減少傾向にある。またそれに比例するように、高齢化も年々進んでいる。人口が減少してきている原因として石垣花子さんは、「東日本大震災の影響は大きいかもしれない。あの震災が衝撃的で、南海トラフも同じかそれ以上になると思った人たちが増えていって、久能から引っ越す人が多くなった雰囲気を感じた」と語っていた。2011年の東日本大震災以降、久能を含む静岡市の沿海部では災害への危機感が非常に高まったことがわかる。また、同じく花子さんへのインタビューでは2004年くらいまでは、各家庭の女性たちが婦人会に参加し、1年に1度球技大会をするなどしていたという。しかし、この婦人会も人口減少とともに自然消滅してしまった。このように、人口減少・高齢化に伴い隣組、婦人会などの地域の住民組織が衰退し、その組織をベースにスポーツをする機会も減少してしまった。

そのような状況下で、小澤さんたちはグラウンドゴルフを通してスポーツの機会を増やすと同時に人とのつながりを再構築している。ただ、人口が減少しており高齢化率も高い久能では、グラウンドゴルフをする人がそもそも少なく、葬会のメンバーはより多くの人とプレイできる大谷などの他の地域に赴く。また、久能の特色として農家が多いため、多忙な農作業の最中、趣味のために時間を使う人が少ないことが考えられる。石垣花子さんも、「仕事を放ってグラウンドゴルフをして遊んでいると他の人に思われるのが嫌になってやめてしまった友人が何人かいた」と話していた。多忙な農作業のなかで、暇を見つけてグラウン

ドゴルフをするにしても周りの目が気になり、やめてしまうこともあるのだ。

それでもグラウンドゴルフを続ける人たちは、その手軽さや人との関係づくりのしやすさ、共通の話題を持てることなどを魅力に感じているのだろう。高齢になり、仕事を引退すると自由な時間が増える。そのような空いた時間に「暇つぶし」としてグラウンドゴルフをすることで日常生活が充実するのではないだろうか。またその暇つぶしを、友人や他の地域の人、家族と共有することができればより楽しくなるだろう。グラウンドゴルフをする意義はこうしたところにあるのではないだろうか。

最後に、「暇」という時間の使い方と人生の豊かさの関係について、國分功一郎著『暇と退屈の倫理学』（2011）を参考に考察してみたい。私たちはしばしば、暇と退屈を混同して使っている。しかし國分によれば、「暇」と「退屈」は全く別物であるという。暇とは、何もすることのない、する必要のない時間を指しており、暇のなかにいる人の在り方や感じ方とは無関係であるという。それに対して退屈とは、何かをしたいのにできないという感情や気分を指しており、人の在り方や感じ方に関わっているという（國分 2011：100-101 頁）。

さらに私たちは暇をネガティブなイメージと結びつけてしまいがちである。しかし、國分によれば、暇があるとは余裕があるということであり、さらに余裕があるということは裕福であるということだという。すなわち、忙しく働かなくても生活することができるという経済的条件を手に入れているということである。逆に言えば、暇がない人たちというのは、自らの時間を労働に費やさなければ生きていくことができない人たちのことであるという（國分 2011：102-103）。國分は暇な時間の使い方が人生をより豊かなものにすることを哲学者の視点から論じている。文中には次のような言葉が書かれている。

人はパンがなければ生きていけない。しかし、パンだけで生きるべきでもない。私たちはパンだけでなく、バラももつめよう。生きることはバラで飾られねばならない（國分 2011：27）。

これは、パンのような生きるために必要不可欠なものだけでなく、バラのように一見生きるためには無駄に思えるものも豊かな生活を送るためには必要であるということを表している。生きるために必要な労働に勤しむことは悪いことではない。しかし、小澤さんや石垣さん夫妻のように、グラウンドゴルフのような「バラ」を日々の生活に添えることで人生がより豊かになるのではないだろうか。

6 おわりに

私は小さい頃からスポーツが好きで、現在も週に 1、2 回バスケットボールをしている。

しかし大学での課題やテスト、アルバイトなどで時間がつくれなくなることが最近になって増えてきていることを実感する。ただ、今回の久能での調査でわかったように「暇つぶし」は日々の生活や人生を豊かにする。今の体力がこれからどのように低下していくかはわからないが、久能の人たちから学んだ「人生を楽しむコツ」を胸に日々を生きていこうと思う。

謝辞

本調査を行うにあたり、多くの方に貴重なお時間を割いていただき、お話を聞かせてもらいました。複数回のインタビューにも快く応じてくださり、自分自身、楽しみながら調査をすることができました。そして拙い文章ではありますが本報告書を完成させることができました。どれも皆様のご協力あってのことだと思えます。本当にありがとうございました。

参考文献

國分功一郎

2011 『暇と退屈の倫理学』朝日出版社。

静岡市立久能小学校編

1982 『久能の昔を伝えるもの』静岡市立久能小学校 PTA。